

公益財団法人杉浦記念財団

杉浦記念財団通信



第4回まちづくりシンポが盛況裏に開催

2040・60年の「未来の生き方改革」テーマに次世代が熱弁振るう



ステージに立つ次世代研究チームメンバーの各氏。

杉浦記念財団
杉浦昭子理事長

杉浦記念財団の杉浦昭子理事長（写真）は開会に当たり「地域の人々に役立ちたいと8年前に財団を設立、このシンポジウムも4回目を迎えた。今回も満席となり大変感謝しています」と挨拶しました。

地域ケア政策ネットワークの森貞述理事は、「今日は将来を担う30、40代の方達が2040・60年の生き方について発表するが、会場の皆さまもぜひ「私ごと」として、未来を考えてください」と呼びかけました。

来賓挨拶では愛知県大村秀章県知事代理の福祉局植羅哲也氏が、「超高齢社会を迎え地域のつながりの再構築が求められている。これを今後のまちづくりに役立てていただきたい」と述べました。

『少子高齢社会・AI時代の働き方、暮らし方』を考える

「第4回長生きを喜べるまちづくりシンポジウム」は、「未来の生き方改革～2040年・2060年に向けて～」をテーマに9月20日に開催。座長の大島氏の趣旨説明に続き、8名の次世代研究チームによる議論がスタートしました。メンバーの青山氏が司会として登壇し、「数十年

後に控える『真の高齢社会』に高齢者となる我々中堅世代で議論してきたことを元に、『未来の生き方』について皆さまと一緒に考える時間にしたい」と述べ、最初に未来のイメージを会場内で共有するための動画が上映されました。総務省が昨年作成した「Connect future 5Gでつながる世界」という短編で、2020年後半から2030年代の日本の社会と家族をイメージした内容です。

上映後は、次世代研究チームメンバーの三矢、岩岡両氏が動画について、買い物、医療、暮らしの3点から解説。無人店舗での買い物シーンについて「接客や在庫管理も自動化されると店員が不要になる。テクノロジーの進展で、人間の仕事なくなることは論点の一つ」とし、遠隔医療に関するシーンについては、「超高齢社会では重要となる。テクノロジーを活用し、在宅で診察を受けられるサービスは既に過疎地などで始まっている」と説明。続いて「移動がないのは楽だが、待合室での会話の機会がなくなるなど、コミュニケーションで満たされない部分もあるのでは」「テクノロジーの発達によるコミュニティの変化も、議論のポイント」などと指摘しました。

拡張現実(AR)として登場した遠方の孫が老夫婦の金婚式を祝うシーンについては、「遠くにいても同じ場所にいるようなコミュニケーションが取れるようになる」と説明。最後に、「日本では一人暮らしの単独世帯が現時点で約3割。今後は高齢者が一人で暮らしながら、地域にどう関わるかも議論のポイントでは」と整理しました。

2060年超高齢社会への危機意識をもって

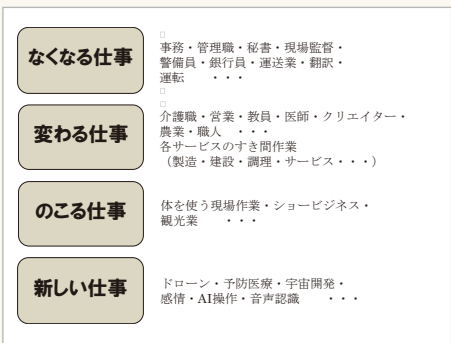
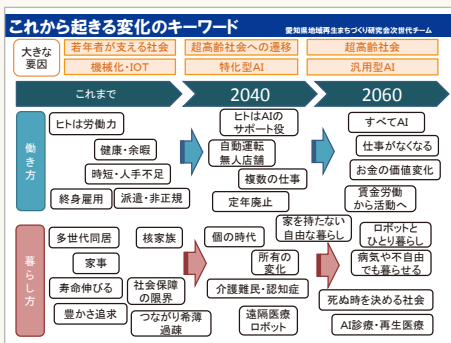
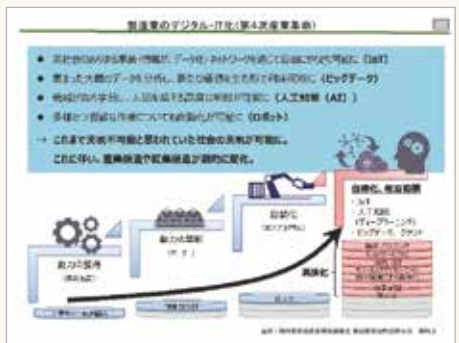
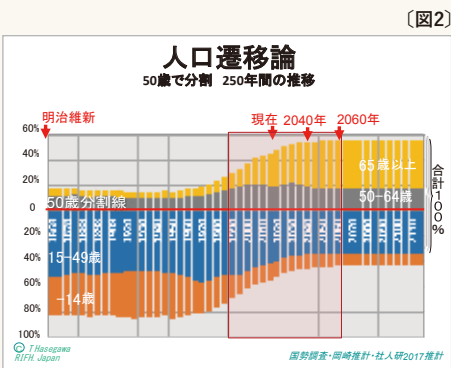
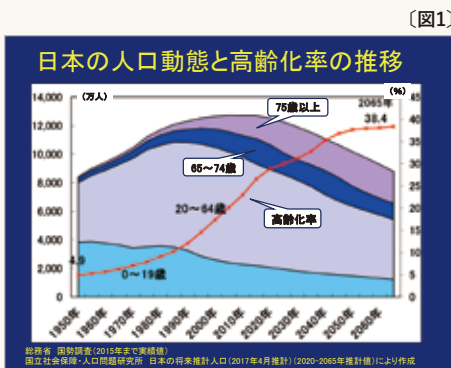
この研究会は来たる超高齢社会への危機意識から始まりました。最も深刻な時代は30年か40年先に訪れる〔図1〕と考え、その時に高齢者となる40代を中心としたメンバーが集まっていたり、1年かけて議論を重ねてきました。今日はその研究結果を発表したいと思います。

取り上げたテーマは大きく分けて2つあります。1つは彼らが考える将来の超高齢社会の実態です。もう1つは、現在すでに様々な場面で活用されているAI(人工知能)の将来についてです。

近年のAI、ロボット技術の進化は実に飛躍的

大島伸一氏
国立長寿医療研究センター
名誉総長
日本福祉大学常務理事
愛知県地域再生・
まちづくり研究会座長

で、40年後には鉄腕アトムで描かれた世界が現実になるのではと想像されます。少子高齢化により人口構造が一変する日本社会とAI、ロボット技術がどのように関わるのか。現在30、40代の方は当事者として、またその頃には存在しないであろう私のような60、70代の方には、今から若い人たちに何を伝えていけばいいのかを考える機会にしていいただければと思います。



〔次世代研究チーム報告〕

2040・60年がなぜ重要なのか



日渡健介氏
未来医療研究機構

超高齢社会の2つの転換点

将来の超高齢社会を考える上で、なぜ2040年、60年という2つの年が重要なのか、この人口遷移のグラフ〔図2〕をベースに説明します。これは明治維新から150年間で日本の人口の年齢別分布がどう変化するかを表しています。50歳を境に赤い線が引かれていますが、1970年までの日本社会は、60歳以上の高齢者及び50～64歳の壮年者の人口は非常に少なかったことがわかります。

しかし1990年頃のバブル崩壊の時期から、50歳以上人口が大きく増加し始め、経済低迷の陰で人口構成の大きな変化が起きてきました。現在はまさに、その変化のただ中にあります。2040年は団塊ジュニア世代が高齢者になる年であり、2060年になると高齢者人口が全人口の38%に達し、その構造が固定化されると予測されています。

我々は、超高齢社会を考える上でこの2つの年が重要な意味を持ち、これらを基準にして未来予測することで課題を抽出できると考え、これまで議論を行ってきました。

技術の進化で変わる働き方、暮らし方



青山幸一氏
豊根村農林土木課課長

人がAIをサポートする時代へ

これから「第4次産業革命」によって、大きく技術が変わると言われています〔図3〕。ビッグデータや人工知能、ロボットなど、今まで実現不可能と思われていたことを変え

る新しい技術が、私たちの暮らしにどう影響するかを考える必要があります。

2040年、60年に向けて予想される人口と技術に関する変化について、キーワードを挙げてみました〔図4〕。例えば2040年には、自動運転や無人店舗は間違いなく登場してくると思います。また、AIの登場によって人間の仕事がなくなるという話も聞かれますが、2060年には、AIが人をサポートするのではなく、人がAIをサポートする時代が来るかもしれません。そうすると仕事や労働の意味や、賃金労働について見直す必要も出てくると思います。

2060年の家族の形態とは？

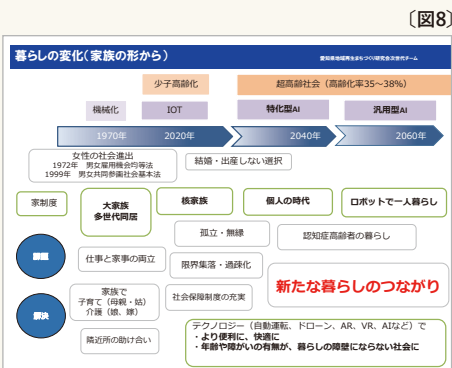
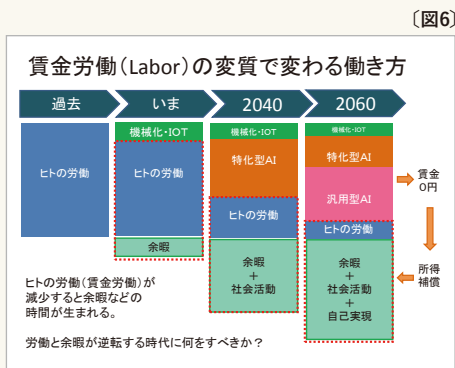
以前は多世代同居で支え合いながら暮ら

す時代がありました。その後には核家族化が進み、今は「個の時代」とも言われています。その一方、平均寿命が格段に伸びてきています。そういう中、今までの社会保障がそろそろ限界に来ているとも言われており、介護難民や認知症の問題は2040年よりも前に深刻化するのではないかと考えられます。

2060年には、家族の形態はどうなっているのでしょうか。一人でロボットと暮らすことが普通になっているかもしれません。また、自分の死ぬ時を決めるなど、自分の死を自らデザインする社会になっていくのかもしれません。

このように、「働き方」と「暮らし方」という2つの観点から20年後、40年後の未来について、それぞれのチームで行った研究内容を発表したいと思います。

SYMPOSIUM REPORT
まちづくりシンポジウム採録



◎次世代研究チームメンバー 敬称略・順不同
 青山幸一(豊根村農林土木課課長)、長谷川友紀(コミュニティユースバンクmomo副代表理事)
 三矢勝司(岡崎まち育てセンター・りた事務局次長)、日渡健介(未来医療研究機構)
 西岡麻知子(南医療生協地域ささえあいセンター部長)、岩岡ひとみ(全国福祉理美容師養成協会事務局長)
 都築晃(藤田医科大学地域包括ケア中核センター 医学博士 理学療法士)、若杉玲子(長久手市総合政策課課長)

働き方について

技術が変える
人間と仕事の関係



発表する青山氏(左)と長谷川(友)氏



座長の後房雄氏(右)(愛知大学地域政策学教授/名古屋大学名誉教授)とコメントの長谷川敏彦氏(未来医療研究機構代表理事)

AIが働き方を一変させる

座長を務める後氏は「2015年に野村総研とハーバード大学が行った調査によれば、日本に今存在する601種類の仕事の49%が2030年にはAIに代わるとされている。そうした将来の社会で、働くということについて考えた」と述べました。

続いて、AIに関する将来の働き方の変化について、青山氏が発表しました。「2040年までは特定の作業を行う『特化型AI』の時代が続

くが、2060年には人間同様に自分自身の能力で解決できる、もしくは人間より能力がある『汎用型AI』の時代が来る」。

「そうなると大半の人が失業して、人間が働かなくなる時代が来るのでは」として、AIの発達により、なくなる可能性がある仕事の例として秘書、銀行員、翻訳、運送業などが挙げられました(図5)。「内容が変化する仕事は介護、医師、教員など、そのまま残る仕事はショービジネスや観光などがある。一方、新しい仕事としてはドローン操作や予防医療、AI操作などが考えられる」と述べました。

労働と余暇が逆転する時代に

続いて、働き方の変化がもたらすプラス面とマイナス面について、長谷川友紀氏が発表しました。2040年までの特化型AIの労働力代用によるプラス面として「定年延長や外国人労働者の受入拡大などで解消しようとしている労働人口の埋め合わせができる。またAIが働く分、人間の労働時間が減ることで余暇も増える」と述べ、マイナス面としては「仕事が減ることにより収入が減少する。AIにとって代わられる仕事とそうでない仕事に分かれることで貧富の差が拡大する」と指摘しました。

また技術の進展による仕事の質の変化について、「プラス面は生産性や創造性が向上すること、AI適応力の格差の拡大がマイナス面として考えられる」としました。さらに2060年には汎用型AIが大半の仕事を代用する可能性があり、人間が労働から解放されるというプラス面とともに、収入が無くなり、仕事とともに居場所も失う人が出るというマイナス面が指摘されました。

未来の暮らしイメージシート

項目	2019年(現在)	2040年	2060年
あなたの年齢			
どこで暮らしている?			
誰と暮らしている?			
どんな働き方をしている?			
どんな暮らし方をしている?			
目的意識イメージ	0.00		
	1.00		
	2.00		
	3.00		
	4.00		
	5.00		
	6.00		
	7.00		
	8.00		
	9.00		
	10.00		
	11.00		
	12.00		
	13.00		
	14.00		
	15.00		
	16.00		
	17.00		
	18.00		
	19.00		
	20.00		
	21.00		
	22.00		
	23.00		
	24.00		
	25.00		
	26.00		
	27.00		
	28.00		
	29.00		
	30.00		

(図9)

「労働時間が減れば余暇時間が増えるが、収入がなくてどう生きていくのかという問題がある。労働と余暇が逆転してしまう時代に、私たちは何をすべきかが問われている(図6)」という言葉で発表が締めくくられました。

後氏は、「これまでは年金制度や失業手当、生活保護を組み合わせることで、テクノロジーのマイナス面をカバーしながらプラス面を活用してきたが、今後は人口問題とテクノロジーを合わせて考える必要がある」と述べました。

コメントの長谷川敏彦氏は、「高齢化は日本だけでなく、韓国は2067年に46%、台湾でも41%が高齢者となり中国沿岸部も高齢化が進んでいる。現在、世界経済を牽引する東シナ海を囲む地域が、超高齢社会を牽引することになる」と述べました。「今後40年をどう暮らして働くか、韓国、台湾、中国の同世代と知恵を出し合い考えていく必要がある」と、国を超えた連携の重要性を強調しました。

SYMPOSIUM REPORT

まちづくりシンポジウム採録

暮らし方について

変化する
家族のあり方を考える

発表する西岡氏(左)、都築氏(中央)、若杉氏



座長の大貫徹氏(右)(国際ファッション専門職大学教授/名古屋工業大学名誉教授)とコメントーターの石田芳弘氏(至學館大学コミュニケーション研究所所長/元犬山市長)

2040年は単独世帯が40%に

座長の大貫氏からの「このパートでは、特に家族のあり方について考えたい」というコメントに続き、次世代研究チームメンバーの西岡氏が研究発表を行いました。

まず2040年の単独世帯率は40%という総務省の予測(図7)を紹介し「家族で暮らす人たちが稀有な存在になるかもしれない」として、「今後、1人で快適に暮らすための技術革新が進むだろう」と述べました。

具体的には、生体センサーが起床時間を感知し、排泄により体調がチェックされ、朝食は必要な栄養素を計算したメニューをロボットが運び、結婚しなくても仮想現実(VR)で誰かと楽しく食事ができ、いつでもVRで海外旅行が疑似体験できるといった暮らしです。

これについては、研究会でも便利という人と、考えられないという人に意見が分かれ、会場では後者に同意する方が大半でした。これに対し「どれだけ技術が発展しても、人間の心や感情をロボットが持つことは考えにくい。これまで人が補い合ってきた暮らしはいつの時代も必要で、今後も不要とはならない」と西岡氏は話しました。

そして、「社会の課題解決は技術だけでなく、新しいつながりづくりにある。もし今後、家族が不要となるなら、新しい人と人とのつながり、ゆるやかな共同体をつくるのが、これから来る個人の時代を生きていくヒントになる。そういう共同体をつくるのが私たちの世代に求められている」と述べ発表を終えました。

ゆるやかな「つながり」を考える

続いて、単独世帯の増加や地域のつながりに関する具体事例が2つ紹介されました。都築氏は、豊明市の豊明団地の事例を紹介。「この団地は独居高齢者率が市内の5倍で、直接顔を合わせる関係をとても大事にしている。学生を含め、周りの人たちとのつながりで支え合っている」との考えを示しました。

続いて、西岡氏からは南医療生協の「おたがいさま運動」が紹介されました。電球が切れた、古新聞が重くて回収に出せないなどの困り事を高齢者がシートに書き込み、解決できる人を地域で探すというもの。「困った人と解決できる人を結ぶことが、新しいつながりになっているのでは」(図8)と分析しました。

コメントーターの石田氏は、「どんなにAIが発達しても人間の精神性には踏み込めない。20、40年先も大事なものはコミュニティにおける助け合い、支え合いをどう装置として維持していくか」と語り、大貫氏は「変化を受け入れ、新たな家族のあり方を模索すべき時代ではないか。コミュニティは地域のつながりだが、今後はテーマや趣味などでゆるやかにつながる社会がやってくるのでは」と述べました。

最後に、総合司会を務めた青山氏は、「多様なつながりをつくるのが今回のテーマ。今回のシンポジウムのように、様々な世代や立場を超えたつながりが求められているのでは」と議論を締めくくりました。

「未来の暮らし方イメージシート」

シンポジウムの最後に、会場に配布された「未来の暮らし方イメージシート」(図9)について、長谷川(友)氏から説明がありました。「現在」「2040年」「2060年」の各欄に「どこで誰と暮らしているか、どんな働き方や暮らし方をしているかを記入し、1日の過ごし方も考えていただきたい」。続いて若杉氏から長久手市の40、50代職員約40人による活用事例が紹介されました。「女性は友人とシェアハウスに住む、若いボーイフレンドとワイナリーで暮らすなど色々な記入が見られたが、男性の記入内容は、ほぼ全員『妻と暮らす』でした(笑)」と男女によって、かなり異なる傾向が明らかになりました。

〔閉会挨拶〕

安井俊夫氏
愛知総合看護福祉専門学校
もりのがくえん 校長
元 愛知県教育長

「主催者の中で最高齢の82歳である私から最後にご挨拶します。今日は色々な意見や課題が出ましたが、ご自分だけでなく、ご家族と一緒に20、40年後について考える出発点にしていただきたい。私たちもこれを第一歩として頑張っていきたいです」

ゲスト講演

セカンドキャリアについて

岩瀬氏は1974年生まれの44歳で、中日ドラゴンズのリリースピッチャーとして活躍後2018年に選手を引退しました。「20年もプロ野球選手として生活を送れるとは思ってなかった」そうで、今後について元参議院議員で総務大臣政務官を務めた座長の山本保氏から問われると「まだ何も決めていない。20年頑張ってきたので、ゆっくりする時期も必要。なるようになる」と回答。「やはり人間、生きていく中で目標があると頑張れる力が

岩瀬紀氏
スポーツコメントーター
元中日ドラゴンズ選手

湧いてくる」として、心身を休めながら次の目標について模索している姿が感じられました。

質疑応答の時間では、現役時代の試合などについて会場から次々と質問が投げかけられ、根強い人気ぶりが伺えるとともに、今後の新たな再出発への期待も高まっているようでした。